

【産学連携】大分合同新聞社との連携授業を実施 「おおいた遺産と地域づくり」

APUでは、2017年秋に大分合同新聞社と結んだ包括的連携協定を基に、大分合同新聞と連携した公開講座などを実施しています。久保隆行 准教授（アジア太平洋学部）と大分合同新聞社が実施する、大分を「知る」「生かす」「発信する」をテーマとした連携授業「おおいた遺産と地域づくり」は、昨年度に続き2回目の実施となりました。

本年は、36名の学生が受講し、講義とフィールドスタディを交互に組み合わせた授業構成で「おおいた」について学びました。講義では、大分合同新聞社が創刊120周年事業の一環として連載・出版した「おおいた遺産」をテキストとして使用し、更に県内の自然・文化の調査研究の第一線で活躍する方々を講師として招きました。フィールドスタディでは、講義で学んだ事柄を実際に目で見ながら学びを深めました。7週間の授業期間中、国東エリアや豊後大野エリア、日田エリアなどにある名所約13箇所を訪れました。



豊後大野市 沈墮の滝（発電所跡）



豊後高田市 昭和の町



宇佐市 宇佐神宮

11月14日（水）に別府市上田の湯町の別府公会堂であった最終発表会では受講生が7チームに分かれ、「おおいた遺産」を観光資源として活用した地域づくりのアイデアを発表しました。

【学生が発表したテーマ】

「杵築の城下町を活用した地域づくり～インバウンド誘客に着目して」、「豊後高田市～アジアからのインバウンド観光客を増やすには」、「昭和の町 改造大作戦 ～見る観光から体験する観光へ」、「WAKU WAKU テラハク（寺泊）～国東でやっ寺！」、「日田市豆田地区がインバウンドに対応するためには」、「富貴寺を世界文化遺産へ」

【久保准教授コメント】

APUには全世界、全国から多くの学生が集まっています。彼らはいずれは巣立っていきますが、4年の間に大分各地の素晴らしい歴史や文化について学ぶことができれば、将来的に大分地域の魅力を世界や全国に広めることにつながっていくはずで、地域の皆様の協力のもと、大分地域の歴史的文化的遺産について、座学にて十分な知識を得たうえで、実際に現地をめぐるといった体験型の授業を実現するに至りました。その恩返しとして、学生たちには現地で感じた問題や可能性について分析をしたうえで、それら地域の持続的な発展の方策について社会に向けて提案していました。

2年目となる今回は、学生たちがより具体的な提案をできたのではないかと考えています。提案のなかの一つ「**原尻の滝（大分県豊後大野市）によるインバウンド誘客**」をテーマにしたプレゼンでは、原尻の滝を観光集客にさらに活用する提案として、滝付近でのグランピングや滝へのプロジェクションマッピングによるイベントの企画などが示されました。その提案に対して、豊後大野市の地域づくりのご担当者様から高い評価をいただき、今後も学生たちが地域づくりにかかわっていくきっかけをいただいています。本授業のような産官学連携型の体験型あるいは実践型の授業をもっと増やしていくことが、大分地域の持続的な発展に寄与していくのではないかと考えています。本授業は、そのロールモデルとして発展していけることを願っています。

